批評・紹介

近世日本の華僑研究

——李獻璋著『長崎唐人の研究』に寄せて——

眞榮平　房　昭

一、華僑研究の動向

國境を超えた經濟活動や人間の交流が世界的規模で擴がりつつある現在、華僑・華人問題は、過去の歴史的現象にとどまらず、まさに現在から將來にわたる問題として、アジア研究の重要なテーマとなっている。近年の華僑研究は、中國と周邊アジア諸國との貿易・通商活動をはじめ、文化摩擦、文化變容、勞働力移動、國際關係といった様々な領域が交錯しつつ、新たな視點から調査研究が展開されている。そのような狀況下において、「華僑史は廣域史、學際研究對象、そして社會史であるから、幅廣い方法、資料、學者を動員するフォーラムがつくられねば有效な研究は育たない」（斯波義信「華僑」『シリーズ世界史への問い3　移動と交流』岩波書店、一九九〇年）ともいわれる。

一七世紀以降の日本華僑に視點を限定していえば、江戸時代の對中國貿易の窓口であった長崎における華僑研究は、本稿で紹介する李獻璋氏の著作のほか、内田直作氏『日本華僑社會の研究』（同文館、一九四九年）、中村質氏「近世の日本華僑」（箭内健次監修『九州文化論集2　外來文化と九州』平凡社、一九七三年）等のすぐれた先驅的業績が蓄積されている。また、幕末開港から近現代にかけての研究論文も多數ある。

最近では、日本の近世から近代移行期における對アジア貿易の特質を考える上でも、華僑の存在とその歴史的役割の大きさが注目されるようになってきた。たとえば、一八八〇年代の日本をとりまく國際環境の變化に注目しながら、アジア市場を舞臺に廣く商業活動を展開する中國商人の動きと、産業革命をむかえた日本貿易との關連について詳しく檢討した籠谷直人氏は、綿製品・マッチ・米などの對アジア主要貿易商品をめぐる中國商人の「價格規制」と日本商人のヘゲモニー爭いに焦點をあて、日本の近代化過程におけるアジアからの「衝擊」の内實およびその克服過程を照射している（籠谷直人「アジアからの衝擊と日本の近代——中國人貿易商人の團結力に注目して——」『日本史研究』第三四四號、一九九一年）。

ところで、明治初期における中國商人の旺盛な活動ぶりについて、東京外國語學校で教鞭をとっていたロシア人のメーチニコフは、次のような興味深い記錄を殘している。

「ヨーロッパ人街でも日本人街でも、主役はなんといっても中國人であった。近鄰諸國の港町から、雲霞のようにこの地に押し寄せてきたこれらの中國人は、じっくりと小金を儲けることにかけては、日本人やヨーロッパ人など足元にもおよばず、こうした遠い租界地でも、成金ぶって小錢を手ばなす連中があれば、そうした小錢は中國人の怪物的手腕によって、メキシコ・ドルにもオリエンタル・バンク發行の紙幣にも膨れあがっていくことだろう。わたしが知るかぎり、ほとんどすべてのヨーロッパ人は、この地（日本）で

はじめこそあっというまに荒稼ぎするが、そのあとは引き際をわきまえぬ賭博者の宿命で、またたくまにすってんてんになってしまうのだった。」（メーチニコフ著・渡邊雅司譯『回想の明治維新』岩波文庫、九四～九五頁）

右の史料からも窺えるように、日本で堅實地味な努力を積み重ねて成功した華僑の例は多い。神戸で活躍した吳錦堂（浙江省出身）の一例をあげると、はじめは長崎に來て貿易に從事し、のち大阪をへて一八九〇年頃から神戸を本據として、綿糸・綿布・マッチなどの輸出、中國產の棉花・絹・陶磁器などの輸入事業を多角的に展開した。さらに紡績やセメントといった工業部門にも資本を投下し、また、神戸華僑同文學校を創設するなど教育や慈善活動にも力を盡くした。

こうした近代日本における華僑史の背景を近世にまでさかのぼって探求し、日本華僑の歷史的特質を東アジア史のなかで考えていくためには、江戸時代の唐人の研究を深める必要があるだろう。その意味で、このたび上梓された李獻璋『長崎唐人の研究』から多くを學び、その成果をさらに發展的に繼承することが求められる。

二、『長崎唐人の研究』について

本書は、明・清時代に長崎へ渡航・居留した中國人、いわゆる「唐人」についての論考を集大成したものである。著者の李獻璋氏は、中國の航海守護神・媽祖についての實證的研究で廣く知られている（『媽祖信仰の研究』泰山文物社、一九七八年）。これまで數十年以上にわたり、媽祖・唐人の研究に精力を注がれた氏の研鑽に、後學の一人として深い敬意を表し、本書の公刊を喜びたい。

本書は、華僑問題、日中關係、長崎貿易の歷史に關心をもつ研究者はもちろんのこと、日本史・東洋史という學問領域を超えて專門を異にする多くの人にとって、知的刺激を與えるものと期待される。長崎華僑史の專門家ではない評者が、あえて本書紹介の責を引き受けた理由もそこにある。不案內ゆえに多くの誤解も豫想されるが、著者のご海容とご批正をお願いしたい。

まず本書の主な構成を示すと、次のようである。

前篇　明代における北九州の中國人
　一、明代の五島唐人とその遺蹟
　二、平戸における唐人とその遺跡
　三、唐人が長崎へ來始めた初期のこと
　四、上代の北九州に活躍した唐人

本篇　長崎唐人の研究
　一、唐通事の設置とその變遷
　二、唐人墓地と頭人歐華宇
　三、唐人の朱印船貿易
　四、唐人居留禁止に至るまでの推移
　五、主要住宅唐人の系譜
　六、鎖國の唐人に對する影響
　七、唐船改めと唐船キリシタン事件
　八、唐通事體制の成立
　九、唐人船宿の盛衰と內通事
　十、長崎唐寺の末庵
　十一、慶長～正德間の長崎唐人の過世記錄

附　長崎唐人研究資料

＊　＊　＊

本書全體は大きく前・後二篇に分かれる。前篇では、明代およびそれ以前に、五島・平戸・長崎・博多・豐後など九州各地に渡來した唐人の動向について考察し、さらに本篇の各論では、江戸時代を中心とする長崎唐人の歴史的活動について、詳細な檢討を加えている。全體的バランスからみると、四五二頁のうち約八割以上を江戸時代の考察にあてているのが特徴であり、後半部の約五〇頁は、唐寺の過去帳・由緒書・墓碑銘文などから作成された長崎唐人の編年配列記事、和文資料目錄を收錄している。

以下、本篇の構成に沿って、各論の內容を簡潔に紹介しながら、若干のコメントを附け加えることにしたい。

一、唐通事の創設年代について考證し、初代の唐通事となった馮六（馮六官）、清河歌之助（張道濟）らの經歴を明らかにしている。

二、唐人墓地が慶長初年に下付された經緯や、歐華宇らの事績を考察している。また、平戸唐人の華宇（イギリス商館長コックス日記に登場する Whow）は、歐華宇とは別人とみなす岩生成一氏の說を批判し、墓碑銘文等から同一人說を唱えている。

三、唐人の朱印船貿易にテーマを絞って考察を加え、派船一覽表を掲げる。唐人の朱印船貿易は、一六一四（慶長一九）年から一六一八（元和四）年まで續き、その間に唐人の數は約二五〇〇人に增加し、長崎の人口の約一割を占めたという。なお、朱印船貿易の「ヨーロッパ人年度別派船表」とあるのは、その內容からみて明らかに日本人派船表の誤りである（一三六頁）。

四、日本に在留した中國商人が「住宅唐人」（華僑一世）となっていく、慶長から寬永期にかけての唐人社會の變化を詳しく論じている。一六〇八年頃の長崎の唐人は約十三家であったが、次第に勢力を擴げ、一六一〇年には德川家康が唐船誘致政策によって唐人を保護し、朱印狀を與えた。その頃から唐船の來航數が增大し、唐人船宿を通じて貿易品を賣買するようになった。唐人は出身地の幫單位にグループを形成し、貿易業務の提携、航海守護神である媽祖の祭祀などを共同で行なった。

五、譯司統譜・唐通事會所日錄・族譜・過去帳などの史料から、住宅唐人の系譜、來航の經緯、日本での活動狀況などを追究し、三江・漳泉・福州の幫ごとに詳述している。ここに示された唐人三十數名の履歴は、貿易商・通事・醫者・文人・銀吹職人などで、長崎唐人の多彩な活動ぶりが窺える。

六、「鎖國」の唐人に對する影響を主に檢討している。一六三四（寬永一二）年、幕府が唐船貿易を長崎一港に限定した目的について、キリシタン取締り、白絲の輸入統制、灰吹銀の流出抑制などを理由に擧げた矢野仁一、山脇悌二郎氏ら從來の研究を批判し、唐人の武器密輸事件をふまえ、鎖國令違反を統制するための措置であったと說く。

七、貿易政策から實施された一六三六（寬永一三）年段階の「唐船改め」は、島原の亂以後、檢使によるキリシタン改めとしての性格をもつに至ったと述べ、寬永二一年の唐船キリシタン事件の經緯や唐船請人制度の創設事情などを論じている。

八、「鎖國」以後における唐通事の役職の變遷、職掌、役料などを檢討している。

九、住宅唐人が同鄉の貿易船を相手に經營していた船宿の盛衰に

ついて論じ、船宿口錢銀の制限、總振船制施行、唐人屋敷の設立事情などをあとづけている。

十、興福寺（南京）・福濟寺（漳州・泉州）・崇福寺（福州）のいわゆる唐三か寺に連なる三十餘の末庵の系譜を述べている。

十一、唐寺關係の過去帳、墓碑名、通事家の由緒書など、長崎の郷土史家の渡邊庫輔氏らが收集した記錄その他の史料に基づいて、慶長～正德末年まで約百年間の唐人關係記事を摘出して年代順に整理し、あわせて「長崎唐人研究資料」の目錄を收載する。

＊　＊　＊

本書の大きな特徴は、まず第一に唐人の系譜と活動について關係資料を博搜し、さらに文獻のみならず墓碑などの石刻にも目くばりしながら、綿密な考證を重ねる手法をとっていることである。第二に、平戸・長崎など各地の唐人史蹟を訪ね歩き、現地でフィールドワーク（聞き書き）と文獻考證を重ねて考察し、通說の誤りを舌鋒鋭く批判していることである。これらの點は高く評價されるべきであろう。

しかし、細かい史實の考證にやや比重が置かれすぎたためか、個々の史實の意味するところを總括して位置づける側面が弱くなっているように思われる。たとえば、國家の對外政策の面でみると、（一）江戸幕府の對外政策いわゆる「鎖國令」が長崎の唐人社會にいかなる影響を及ぼしたか、（二）清朝政府は在日唐人をどのように位置づけていたのか、といった本書の基本的テーマに關わる問題があろう。小稿では紙幅の制約もあり、前者の問題に焦點を絞って檢討してみることにしたい。

三、「鎖國令」と唐人貿易

「鎖國」以前、長崎へ來住した唐人數は正確には把握できないが、在住唐人のひとりである劉鳳岐の言によれば、「慶長中期（一六一〇年前後）には二十人に滿たなかったのが、いま十年たらずで二、三千人に急增し、これから推せば日本全體では二、三萬人もいる」といわれている（朱國禎『湧幢小品』卷三十）。唐人の住居は長崎市中に廣く散在し、家屋敷の所有・婚姻・職業・移住等について、一般日本人との法的差別はみられなかった。また、彼らは出身地別に唐僧を招いて興福寺・福濟寺・崇福寺の唐三か寺を創建し、あわせて媽祖を祀るなど、東南アジアとのそれと類似の華僑社會として順調な發展をとげつつあった。

しかし、その發展は「鎖國」によって挫折を餘儀なくされる。一六一六（元和二）年、幕府はヨーロッパ人（ポルトガル・イギリス）の居住・貿易を制限する措置をとったが、この時點ではまだ唐人貿易の自由は認められていた。それは、貿易統制の上からも幕府にとって「好都合」だったからだという（一五三頁）。しかし、一六三〇年代の「鎖國令」が日本人の全面的渡航禁止に發展して、唐船の來航貿易は有利になった反面、長崎住宅唐人は船を出すことも國へ歸ることもできなくなったといわれる（二七五～二七六頁）。

唐人社會に「鎖國」が及ぼした影響については、すでに中村質氏の研究で指摘されているように、寛永一二（一六三五）年のいわゆる第三次「鎖國令」によって、日本の在住唐人は「日本人同樣に扱われ」たため、海外派船はおろか、來航唐船に乘組んでの出海も全面的に禁じられてしまった（前掲論文「近世の日本華僑」一六九

頁)。つまり、「鎖國」によって日本華僑は直接的な海外貿易を封じ込められたのである。さらに、日本生まれの華僑二世およびその子孫たちは日本女性と婚姻關係を結び、名前も多くは母方の姓か、本貫地に因む日本式の複姓に改め、また髪型や衣服といった面でも日本風の生活習慣を受け入れるなど、日本社會に同化していく傾向がみられた。

こうした日本の歴史を東南アジアのそれと比較すると、大きな相違がある。すなわち、東南アジア各地の華僑社會では、海外移民の新たな流入により常に再生をくりかえしながら順調な發展をとげ、現在まで隆盛を保持している。それとは對照的に近世日本の華僑の歴史は、そのアジア的發展・開花の道を「鎖國」によって摘み取られたといえよう。

次に、アジアにおける「ヒト(人間)の移動」という視點から、近世の日本と東南アジアを比較すると、どこが違うのであろうか。その大きな相違點のひとつは、日本では外國人の移民流入(とくに女性)を拒否する政策がとられた點にあると考えられる。たとえば、中國人が女性や家族をともなって日本へ來て貿易したり定住することは、「鎖國」體制下では一切許されなかった。すなわち中國の華南沿岸や東南アジア各地から長崎へ來航した唐人たちは、全員がいわば「單身赴任」であった。

このように「ヒト(人間)の移動」という視點からみると、東南アジア諸國では中國人移民を、妻子連れ・家族ぐるみで大量に受け入れた歴史をもつ。一方、江戸時代の日本はそれを全く排除したという點で、きわめて特異な國家であったといえよう。かかる幕藩制國家の對外政策の特質はいいかえれば、海外から貿易品(モノ)は大量に受け入れるが、人間(ヒト)の流入・定住は拒否するという政策の上に成り立っていた。こうした近世日本の對外政策の論理は、琉球王國をも包み込んでほぼ貫徹されていた。その結果、「鎖國」體制が成立した一七世紀半ば以降、幕末の開國期に至るまで、明清王朝の交替による動亂期を除いて、中國人が集團で日本列島および琉球に渡來、定住するという現象は無かったのである。

最後に、「鎖國」の用語概念をめぐる問題點にふれておく必要がある。近年、日本近世史研究の分野では、從來の「鎖國」という用語が當時の對外關係史の實態を正しく反映していないという批判が提起されており、近世日本の對外關係のありかたをアジア史の文脈で表現する一つの方法として、「海禁」概念の歴史的變遷についての檢討が進められている(荒野泰典「海禁と鎖國」『アジアのなかの日本史Ⅱ 外交と戰爭』東京大學出版會、一九九二年、參照)。このような問題提起をアジア史研究の視座からどのように受け止めていくかが、今後の議論を深めていくうえで一つの重要な鍵となろう。

本書の敍述をみると、本篇の第六を除いて「鎖國」・「海禁」いずれの概念もほとんど用いられていない。本書はこうした概念にこだわらず、唐人の活動に焦點をあてて考察を深めていくという獨特の方法を堅持している。その膨大な記述を前にすると、近年の「鎖國」・「海禁」に關する論議がまるでよそごとのように「風化」されていくかのような錯覺にも陥りかねない。しかし、個々の史實を靜態的に記述していく本書のような方法だけでは、歴史の動態的な理解がきわめて困難になってしまうという問題點がある。たとえば、一六三〇年代の變動期を長崎唐人がどのように生きぬいていったの

か、という重要な問題についての見解が明示されていない點に、それが端的に現われているように思う。

近世日本の對外關係において、一六三〇年代が大きな歴史的劃期であることは、「鎖國」・「海禁」いずれの用語を支持するにせよ、大方の異論はない。もし、本書が日本史の概念に縛られない獨自の方法的立場を貫くならば、一六三〇年代の歴史變動が唐人社會にいかなる影響を及ぼしたかという點について、著者自身の主張をもっと明確に提示するための獨自の論理構成と敍述上の工夫が必要ではなかろうか。

一九九一年一〇月　佐世保　親和銀行ふるさと振興基金會

A五判　四五二頁　非賣品

〈附記〉

本書は、書籍刊行による地域社會への文化的奉仕という理念に基づいて創刊された「親和文庫」シリーズの第一六號である。本書の學術的價値については、山根幸夫氏が『東方』第一四〇號において「長崎貿易を知る重要な研究書」として、早くから紹介されている。しかし、本書は殘念なことに限定出版・非賣品であるため、研究者の間でも充分には知られていない。本書の入手を希望される方のために、發行所の連絡先を附記しておく。

佐世保市島瀬町一〇番―一二號

親和銀行

電話（〇九五六）―二四―五一一一（代表）

鈴木智夫著
洋務運動の研究
――一九世紀後半の中國における工業化と外交の革新についての考察――

岡本隆司

國の內外を問わず、中國近代史研究における領域の擴大、テーマの細分化、これらに伴う史料の出版や研究成果の量的な增加は、評者一人の嘆息にすぎないかもしれないが、學界の動靜にひととおり通じようとするだけでも過重な作業だと感じせしめるまでになっている。こうした動きは一九八〇年代初頭より年を下るにつれいよいよ顯著になってきたが、それと併行して、個々の研究內容にも關わってくる理論枠組においては、いわゆる「近代中國史像の再檢討」が半ば最大公約數的な目標のように唱えられており、これもここ十年來の特徴といえよう。研究の增大と新たな方法の要求と模索。一見學界が活性化しているかに思えるこうした現象は、しかしながら、いったんその內實に踏み込んでみると、個々の動向の間には聯關がいたって稀薄で、いささか懷疑的にならざるをえない空虛さを孕んでいるように感じられてならない。

中國近代史の研究において、西洋近代との關係をどのように考えるかは、テーマをいかに設定するかによりさまざまな角度からのアプローチがありえようが、いずれにしても避けて通るわけにはいかない作業であろう。だとすれば、西洋との交渉が本格化し始めた一